

明治期・豊橋から見た中央集権的メディア・システムの形成

小川明子

0. 問題意識

現在、私たちは東京一極集中的なメディア環境の影響を受け、地域に対する話題よりも、東京や全国、あるいは海外の話題に関心を寄せつつある。こうした意識は、いつごろ、どのようにしてできていったのか。私は、以前にも民間放送登場後の地域とメディアについて調査したことがあるが、その際、50年余の歴史を振り返るだけでは不十分であることを実感した。そこで今回は、明治期にまで遡って、地方に暮らす人々がどのような経緯で「メディアによって環境を認識する」ようになったのかを考察してみたい。

1.1 江戸期における地域認識とメディア

日本は律令制の時代から中央集権的性格を有し、江戸時代には幕府が強大な権力を用いて各地域を統合し、参勤交代など江戸と領地を行き来する制度が作られていた。そのため、文化の進んだ地・江戸という感覚は、地方に住む人びとの間にそのころにはすでにあったとされる。

東海道にあった豊橋も、参勤交代をはじめとする人々の公的な往来に日常的に触れていた地域だった。豊橋には、医者や歌人の江戸時代の旅日記が残されているが、当時は静岡西部の秋葉山、愛知県東部の鳳来寺山等への参詣や渥美半島、伊勢への旅が人気だったようで、名古屋との往復は通常2-3泊の行程、江戸には徒歩で10日前後かかっていた。遠方の旅としては、日光や江戸、京都などに遊興の旅に出た記録が残っている（二川宿本陣資料館編,2002）。

庶民もそれなりに旅を楽しんでいたようだ。近世には町や村で「講」という組織が生まれ、相互扶助・輪番制で伊勢をはじめとする寺社への参詣を行った。くじ引きや順番で毎年講から一人ずつ参詣の旅に送り出すこのシステムによって、人々は何年かに一度、自分たちの暮らす町や村から出て、外の世界を見る機会を得た。こうした旅には許可証が不可欠であったが、許可を得ずに飛び出す若者の「抜け参り」や、ほぼ60年に一度起こった伊勢神宮への「おかげ参り」などでは、女性や子どもを含むかなりの数の人びとが自分の暮らす地域から飛び出し、外の世界を見る機会を得ていたと予想される。村に残った人々は、土産話とともに、旅先の錦絵やみやげで、遠い地に思いを馳せた。

1.2 「兵器」としての電信網

旅という例外はあるものの、基本的には閉じられたコミュニティで生活していた近世の人々の生活感覚を変えていったのが明治期以降に登場したメディアであった。そのなかでも明治政府によってもっとも早く敷設されたのが電信である。

当時、欧米諸国は、明治政府にさかんに電信の建設を持ちかけていた。人々はこの新しいメディアに素直に驚き、民営の申請も相次いだのだが、結果的には、政府はこの重要性と影響力を重視し、政治的・軍事的目的での使用を鑑みて、官営が決定された。維新直後の1869年には、東京―横浜、大阪―神戸間に、その後、わずか5年で長崎から北海道まで電信線が架設された。1871年には、上海、ウラジオストクから、長崎県千本に海底ケーブルが陸揚げされ、シベリア経由でヨーロッパ、アメリカへと通信網がつながっている。

当初人々の間では、電信が町の秩序を打ち壊すという邪信が流布し、架設中の電線が切断されたり、電柱が倒されたりする事件がよく起こった。これは、電信線の建設が、政府の威光をかざして強権的に推進されたことで、民衆の反感をかっていたことにも原因があったようだ。庶民には手の届かない価格に設定された電信は、彼らには権力の象徴と映り、人々はこの奇妙な「器械」に反感を持ったのだ（郵便百年史：113―116、松田裕之、2001）。

政府がこのように異常な速さで電信線を敷設したのは、維新後まもなく地方で起きた反乱を押さえ込んでいくためだった。地方で不穏な空気の流れれば、政府は早々に電信線や海底ケーブルを敷設し、西南戦争でも、九州南部で政府軍の進攻に伴って電信網が順次架設された。各地の抵抗勢力の情報が人によって伝えられるのではなく、電信でいち早く伝えられることによって、政府が先手を打つことができたのである。

東海道上にあった豊橋には、1872年に洋館建築の電信局が設置されているが、当時、誰がどのように用いたかといった記録は今のところ見当たらない。しかし、通信料が一文字銀一分であったこと（豊橋市史3巻）や、「電信開通当時は主に官公用に供せられ（名古屋市史）」という記録からみても、当時は庶民にはほとんどなじみのないものであっただろう。80年代後半ごろになると、体制が安定し、さらに新聞によってその効用が伝えられたこともあって、電信に対する偏見が拭い去られていき、さらに郵便局や駅での電信の取扱いが始まると「電報」として人々の間にも利用が急増した。豊橋郵便局の電信取扱件数を見ても、1885年には引受／配達が1万8000通だったのが、1906年には約11万通（豊橋市史3巻）と、日清・日露戦争をはさんだほぼ10年で5倍ほど利用が急増している。

戦況に関わる通信や報道目的の利用とともに、この時期に急増した理由として、電報によっていち早く市場動向をつかむことで売買を有利に展開しようとした商人たちの存在が挙げられる。その一方で、町のほとんどの人々にとっては、電報はなじみのないものであり続けた。

1.3 上意下達のメディア：初期新聞

今でこそ、日々更新され、毎朝配達されるのが当たり前になっている「新聞」も、誕生当時には、人びとにとってきわめて新しい感覚を必要とするできごとであり、それまでの生活とは全く異なる時間・場所感覚、ひいては世界観をもたらすメディアだっただろう。山田俊治は、『日新真事誌』を発行したJ.R.ブラックが、新聞の定期購読の勧誘に訪れた際、商家の主人に「私はひとつ持っているのですよ。それ以上ありますか。」と答えられた記録を例に、新聞が書物と異質な媒体だと認識されることが当初は難しかったことを述べている（山田、2002）。世の中のできごとを理解しやすいように知らせてくれる新聞は、藩という旧来の地域主義を脱し、列強に追いつくことのできる強力な中央集権国家を建設していこうとする明治政府にとって有

効な上意下達のメディアとみなされ、次項で扱う郵便制度の特例にも見られるように、当初は厚い保護政策が採られた。

新聞は、72-3年ごろから県庁所在地クラスの地方大都市でも発行され、郵便制度を通じて、さらに地方へと普及していった。当然のことながら、当時、大都市で発行される新聞は、多くの地域においてその日のうちに届く類のものではなかった。豊橋にはそのころ新聞社がなかったにも関わらず、1890年前後の記録には、「書籍新聞販売店」なる記録がある¹ことから、豊橋の人々は、地元新聞に触れる以前に、東京や名古屋の新聞を購読していたことになる。

1.4 地域社会との融和、そして支配：郵便

初期の新聞の普及に関して、郵便の存在を無視することはできない。1871年に東京-大阪間で開始された郵便制度は、翌年には全国の県庁所在地を結び、73年には全国均一料金の官営郵便網が完成して信書や荷物の運送に変革をもたらした。中央集権国家は、地方や人々の間におびただしい数の書状のやりとりを行う必要があったため、財政的な面からも飛脚制度に替わる国営郵便制度が推進されたのだった（小川常人,1983）。東京、大阪、京都、横浜、神戸、長崎に郵便役所が置かれたほか、1120箇所ほど、民間の人々に局舎を無償で提供してもらったかたちで「郵便取扱所」が開設された。注目すべきなのは、この責任者が、町の資産家、名望家であったことだ。彼らは、江戸時代には武士しか携わることのできなかった国の事業に従事できる極めて名誉なできごととして、献身的な協力を惜しまなかった。このことは、政府側に立てば、伝統的な町の有力者たちを郵便局長という準官吏として中央官庁のもとに新たに再編制しなおし、味方につけていったと考えることもできる²。

当初は新聞も郵便システムを通じて配達されていた。1872年に創刊された郵便報知新聞はその典型的なものであり、大都市で発行された新聞が地方に郵便で届けられていた。これは郵便で新聞が配達される事情を欧米で視察し、のちに、郵便制度を創設した前島密のアイデアであった。前島は、日本の近代化を早期に実現させるためには新聞が必要不可欠で、郵便を通じて情報が全国津々浦々にまで伝達されるようになることを期待していた。日誌、新聞、書籍等をきわめて安い料金での取り扱いとしたほか、認可を受けた新聞社宛に原稿を送る場合には、郵便料金を無料にする規則³も制定して、情報が集まり、かつオピニオンリーダーでもある地域の有力者＝郵便取扱役たちに、各地の情報を随時新聞社に送るように指示（小林正義：2002）も出している。

誕生当初は郵便ポストがどのように機能するかわからずに戸惑った人々も、郵便馬車や汽船、鉄道によるスピードアップと価格低下、取扱地域の拡大などによって、郵便を用いて遠くに住む親族などと書状やハガキのやりとりが行われるようになっていった。比較的低価格な価格設定であったために、私信のやりとりを目的に利用され、いつでも／どこでも／だれでも利用できるシステムとして評価されることの多い郵便だが、一方で、その設立構想や初期の動向を見ると、決してそうした民主的な側面ばかりが企図されていたわけではないようだ。制度の早期成立を促したのは、地方官庁や地方の個人と書状をやりとりする財政的な必要性からであり、前島は、郵便をのちの全国紙のようなものとして構想し、地方の情報を中央で把握し、近代化の意味を地方の隅々にまで伝える中央集権的情報システムとして認識し、推進していた。さら

に彼は、早期に琉球や朝鮮、上海に郵便局や郵便航路を開設し、郵便という情報システムを拡張することで、支配の既成事実を作り上げ、日本の通信システムを張り巡らせることで自国民の進出を促そうとも試みていた(小林,2002)。

1.5 地域間ヒエラルキーを体現する鉄道システム

近代において、地域社会に最も影響を与えた交通システム「鉄道」も、急ピッチで敷設が進められた。イギリス人の指導の下、日本の土木技術を導入しつつ、1872年の新橋―横浜間を皮切りに工事が進められ、1889年には東海道本線が開通し、それまで船で3―4日かかっていた新橋―神戸間が20時間(日本国有鉄道史,1974)で結ばれた⁴。

原田勝正は、初期の線路ネットワークの分析から、日本における鉄道の建設は、列強の植民地支配下にあった国々と異なり、支配体制側が国内における中央集権制を強めていくために導入を急いだという政治的動機が強く、鉄道の建設によって地方の動きを東京に集約していくことを構想していたのではないかと指摘する(原田勝正,1998)。実際、人びとが集落の外に意識を向けていく「向け方」も、鉄道のシステムに沿って作られていったといえる。その地域に鉄道が開通すると、たとえどこかの駅で乗り換えなくてはならなくても、東京や大阪まで汽車に乗っていくことができるという意識を生み出した。地方の町は、鉄道によって隣町と結ばれるだけでなく、上っていく先の都市、そして首都・東京と結ばれることになった。人々もそれを望んだ側面がある。例えば、辰野から豊橋に出てゆく飯田線の場合、中央線が塩尻へ回って木曾福島のほうへ出るルートとなったため、飯田の人々はなんとか鉄道で東京に結びたいと考えて軽便鉄道を建設することになったという(原田, 1998: 161-162)。鉄道とは、国家的な、国際的な社会の広がりや、都市を結節とするツリー状の体系へとくみ上げる中央集権化のメディア(若林,1992: 211)として、駅舎の規模なども相まって地域の階梯をわかりやすい形で体現した。こうした階梯が可視化されることで、明治政府が奨励した立身出世の道筋まで設定してみせたといえるかもしれない。

当初は経済的動機よりも政治的動機が強かった鉄道の敷設だが、鉄道の開業によって、その地域で古くから生産されてきた製品が横浜や神戸に送られ、輸出産業として認められてゆくと、それらが機械工業化されたり、新たな設備を整えた工場が作られたりして、結果として産業革命が引き起こされてゆく。こうした例に注目した企業家たちは、今度は、地域に産業革命を起こすために鉄道を建設することを構想し、1890年前後には、各地で株式会社組織による鉄道が相次ぎ、現在に至る全国主要鉄道網の基礎ができあがっていった。

東海道線の豊橋駅が開業したのは1888年のことで、駅前には人力車が10台常駐し、繁華街と駅とを結ぶ停車場通りが開かれるなど、町の盛り場や様子もそれに伴って大きく変化した。また1890年頃から豊川、南信州、渥美半島方面に向けた鉄道が次々と開通して周辺町村と結ばれるようになると、交通の結節点として、豊橋は急激に都市化していくことになる。また1900年以降、豊橋の製糸業は交通網に下支えされて販路を広げ、海外にも輸出されるようになっていった。鉄道開通前は9000人足らずだった城下町の人口は、歩兵第十八聯隊(1885年)の設置と東海道線開通により、開通後10年でほぼ二倍に膨れ上がった。

当時の人々にとって、鉄道のスピードや車窓の風景が驚くものであったことは想像に難くな

いが、さらに、鉄道のしくみそのものがさまざまな「近代化」を体現していたことにも注目したい。乗車券さえ購入すれば、許可なしで、どのような身分であっても、平等にその地点まで自由に移動することができた。また、それまで話したことの無い人びとが同じ車両に乗り合わせる方式は、階層や地域を越えて相手を人間として認めるという近代社会の掟を体現していた。(原田,1998:52-54)。

鉄道によって人びとの移動が活発になることで、都会見物の土産話や噂話が地方に暮らす人々の耳にも入るようになり、それに伴って地域間の経済活動が活発化していく側面もあった。たとえば、豊橋で電灯会社を設立した福谷元次は、1899年に京都東本願寺の上棟式に参加した際、電灯を見て文明開化を実感し、地元にもぜひ電灯を点したいとの思いで水力発電所を作り、電力会社の基礎を築いていった(豊橋市史3巻)という。

さらに、鉄道のスピードアップによって、雑誌、新聞など都市で発行される紙媒体が、より早く、遠くの地方へ配達されるようになった。印刷物が、時間差なく地方に届くことで、集落の外にほとんど向けられることのなかった住民の関心や意識はより広がっていったといえる。

ところで鉄道運賃は、それほど高いものとはいえなかった。当時の人夫の日当(20-25銭)のほぼ2倍分、つまり、2日間働いた手当てで浜松-豊橋間(36.5キロ)を往復できるかどうかという価格だったというから決して安くはないのだが、歩いてゆくことによる日数や宿泊費等を鑑みれば、特別高くもなかった(豊橋市編,1996:221)。豊橋駅開業後4年目にあたる1891年度の年間乗降客は9万4000人であったが、日露戦争後の1906年には52万2000人と5倍近くになっており、明治後期から、20-30キロの移動が徐々に日常的な移動の範囲内として考えられるようになっていったらしい。

2. 消費される日露戦争

2.1 地方紙の勃興

憲法発布、議会開設に向けて地方政党が勃興しだした1872年ごろから、県庁所在地クラスの都市で地方紙の発刊が始まった。先覚者たちの思想を反映して政党色を帯びたものが多く、背後の政治的見解の相違は時に激しい対立を生み、熾烈な競争が繰り広げられた。

当時愛知県内2位の人口だった豊橋では、1899年に、初の日刊新聞『参陽新報』⁵が、翌年には『新朝報』が創刊され、いずれも政治的立場の違いから、たびたび論戦を繰り広げた。

ところで、明治後期の地域新聞とはどのようなものだったのか、豊橋の『新朝報』を例に見てみよう。時代や主筆によって違いはあるのだが、この新聞は1面で全国的なニュース、2面では東京・名古屋からの電信に基づくニュースと東三河や静岡県遠州地方の主要ニュース、商況を取り扱っている。天下国家の話題がまず優先し、地域社会の問題が二次的な扱いとなっているのは、他地方の地方紙でもほぼ同様で、西洋での地方紙と異なる点とされる点である。自由民権運動という政治的契機を通じて発行された経緯からか、日本の地方紙が、多くの場合本質的にローカル性を真に希求したものとして始まらず、国家を優先する形で始まっている点は注目に値するだろう。

話を戻すと、3面では心中や殺人、窃盗など東三河地域の社会ネタを扱い、その隅には投書欄もある。ここには、豊橋周辺町村での要望や噂が雑多に載せられ、「豊橋病院の久野看護婦

は患者に厳しすぎる」「教員だれだれが最近遊郭に入り浸っている」といった、現在なら誹謗中傷に当たる類のものにあふれている。

ところで有山輝雄は、日露戦争が勃発した1904年の福島県梁川町の新聞購読定期購読世帯(年間を通して日常的に定期購読する世帯)を5%前後と推測している。彼は、新聞店の資料から、住民を①複数紙を定期購読している町の政治経済の中核を担う人びと(5%前後)②医師、教師など定期購読世帯(10%)③不定期に新聞を購読するが、生活に不可欠ではない人びと(30%)、そして自らが直接見聞きし、体験する生活世界のなかだけで生きている人びと(50%)という割合で推測している(有山, 1993: 70-73)。豊橋においても、新聞購読世帯がそれほど多かったわけではない点は踏まえておく必要がある。

2.2 新朝報に見る日露戦争1903-1904

豊橋で新聞が発刊されてのち、最も大きな出来事といえば、1904年に勃発した日露戦争であった。本項では、地域紙「新朝報」をもとに⁶、豊橋という地方都市で、国家的な「戦争」が暮らしの中でどのように受け止められていったのかを垣間見てゆきたい。

ところで、一面で扱われる国家的な政治・経済的話題を、すべての読者が読んでいたとは考えられない。これらは漢文調で、内容を理解するには、政治・経済の深い知識と、常にニュースを追い続けている必要がある。恐らく多くの人々は、三面を中心に読んでいただろう。一面を読んでいただひとは町の人口からすればごくわずかで、人々はこうしたいわゆる「オピニオン・リーダー」から、国家的なニュースを仕入れていたと思われる。

そこで、本稿では、新聞記事の内容もさることながら、「投書函」という人々の投書コーナーに着目してみたい。このコーナーについては前述したとおり、その信憑性については定かではない。しかしそこには、市井の人々の生身の関心がある程度反映されているように見える。下世話であるからこそ、そこに当時の人々の本質的な関心が見て取れるのではないか。遊郭の芸妓、店の売り子の素性、そうした地域生活のあれこれは、そこで生きた人々にとっては、最も重要な関心ごとであったに違いない。あるいは当欄で、記者自身が自社の新聞の評判を投稿したり、話題を捏造したりしたとしても、そこには少なくとも新聞記者自身の関心の向け方が現れていると見ていいのではないか。ちなみに、文体や内容から見て、男性による投稿がほとんどであったと思われる。

さて記事から見ると、03年の末ごろまでは対ロシア的にそれほど扇情的な報道はされておらず、淡々とロシアとの交渉の様子が伝えられているだけである。むしろ、日清戦争後の非戦論の影響もあってか、人々の間に戦争に対して否定的なムードがあったようで、「新朝報」でも、交渉が途切れれば再開を期待する記事が載せられ、「露国の色々」と題して、ロシアの地理、歴史、人々の暮らしについての特集が複数回組まれたりして、なるべく冷静に理解しようという姿勢が見受けられる。

ここで当時の豊橋の新聞事情について振りかえっておくと、1904年当時、「新朝報」は同地の「参陽新報」と激しく競り合い、手近なライバルだった。「投書函」でも、「参陽新報」の誤報や遅配の情報、単なる悪口がとびきり多く、優先的に取り上げられている感がある。一方、「名古屋新聞」と比較した投稿も多く、「新朝報」が目指すべき目標として、愛知県農村部に普

及したこの新聞が意識されているように思われる。

新朝報は近頃非常に紙面の体裁が好くなって記事が活躍してる。今に名古屋新聞を凌駕するであらふ。記者益々奮励せられよ (1903.10.13)

新朝の県会議事は名古屋新聞と同一日に出て名古屋新聞より詳しい (03.10.27)

読者が併読していた新聞としては、他に『万朝報』や『報知新聞』、『日本新聞』、『横浜新聞』、『二六新聞』、『東京日日新聞』『東京朝日新聞』等、東京で発行される新聞の名前が数多く見られ、少なくとも2箇所の新聞販売店を通じて配達されていた記録がある。そして、開戦後になると、こうした新聞と比較する形で、記事の速報性に人々の強い関心が寄せられていくのがわかる。

新朝報の記事の早いのは今に初めぬ事ながら実に関心だ (1904.2.11)

貴新聞の白露戦報の迅速なる都会の新聞にも一步を譲らず実に一驚致し候尚益々御奮励読者に満足をあたへられん事偏に切望す (1904.2.1)

試しにニュース内容について、読売新聞と同じ日で比較してみても、それほど大きな違いはない。まだ地方版が発行されていないこの時期、東京の新聞が速度を上げるために資本を通信システムに投入したとしても、新聞紙を東京、大阪で印刷し、地方に運ぶには距離的・時間的な限界が大きかったのだろう。ちなみに、当時はまだ写真はほとんど紙面に載せられていない⁷。04年1月になると、それまで地元の風評ばかりが取り上げられていた投書函でも、ロシアや軍隊がらみの内容が少しずつ投函されるようになった。

名古屋はおろか我豊橋にも露犬が2-3匹居るといふ噂がある (1904.1.14)

豊橋にも2-3の軍資献納者が見へた。是を見習ってドシドシ出願せよ (1904.1.28)

2月の開戦以降、「新朝報」は何度も号外を出しており、人々は、街中でこうした速報に触れることで、否応なく「戦時」とくに「勝ち戦」という情報環境に引き込まれていったのだろう。投書函も、戦争、軍隊、ロシアに関する話題が急激に増加し、5月ごろには欄のほぼ半分がこの話題で占められ、移住、あるいは派兵されている親族の状況を心配する気持ちと、人々が速さとともにこのニュースを強く欲し始める状況が同時に見えてくる。

満韓在住の我が同胞に関する情報は出来得る限り詳細に報道せられんことを記者足下に望む (1904.02.06)

戦況続々速報せよ好評判好評判 (1904.02.11)

こうした人々の要望に応えるために、新朝報は従軍記者を出して情報を送らせたり、読者の中から情報を送ってくれる兵士を募集したり（実際にはあまり機能しなかった）して、通信網で圧倒的に優位に立つ都市新聞に対抗しようと試みている。さらに、人々のこうした「勝ち戦気分」に応え、自社の新聞に関心をひきつけるために、軍事小説の募集を始めたり、白露戦争をテーマにした民謡の替え歌を掲載したりして、身近なところで消費できる白露戦争がらみの話題を次々提供することで読者の歓心を得ようとする様子が見える。

新朝報所掲の白露戦争替へ歌大流行だドシドシ出してくれたまへ (1904.02.25)

電車に乗ったら中は軍の話で持ちきりだ (1904.03.01)

日本帝国とかけて正札付きの売り物と解く、心はいかほど勝ってもいっせんもまけない (1904.04.13)

このように、豊橋という地方都市においても、開戦後の3月頃から、徐々に人々が「戦勝気分を生きる」ようになってきた姿が垣間見える。もちろん、先に述べた有山の分析からすれば、投書欄だけを見て豊橋全体の様子を想像するのは早計に違いないだろう。しかし、岡山県井原市の新聞販売店の記録も、同様にこの時期の人々が号外を中心とした戦勝の知らせを求めている様子が記されている（日本新聞販売協会編、1969：760）。その一方で、人々に日露戦争を速報したのは新聞ばかりでなかった。ありとあらゆるメディアが有機的に絡み合いながら戦勝気分を煽り、また人々もそれを欲したのだった。

2.3 劇場、幻灯に見る日露戦争

弥生座の芝居で露国將軍は憎にくしくてよい（1904.04.28 新朝報投書函）

東海道線が豊橋に開通した1888年に、駅の近くにてできた初めての本格的劇場⁸は、定員515名の演劇場、弥生座であった。日露戦争が始まった頃、豊橋には6か所の劇場があり、普段は主に歌舞伎や新派の芝居が上演され、時に政党の演説等にも使われた。弥生座は、日露戦争が始まって2ヵ月後の1904年4月、この戦争を題材とした新派演劇を早々に上演した。この演目は、士官に扮した役者のドラマティックな殺陣などが人々の間で話題になって、投書函にも複数の賛辞が寄せられている。こののち、豊橋座などほかの劇場でも日露戦争関連の戦争劇が上演されており、主に新聞などが文字によって伝えた戦況を、興行主たちは芝居で表現してみせることで人々を呼び込もうとした。人々は日露戦争の「物語」を自らの目で「見る」興奮を得るために入場料を支払ったのだろう。

「幻灯」も戦争を「見る」メディアとして用いられている。04年3月4日には、豊橋在住の小野芳水という人物が、最新式の幻灯を用いて、日露事件の状況説明をする旨の広告を「新朝報」に出して視聴を呼びかけているが、その後、それに応えるように、渥美郡、南設楽郡など豊橋周辺の青年会や祭りの余興などとして日露戦争の幻灯上映会が行われた記録が見られる。

さらに、映画もその一翼を担った。今では物語を上映するメディアであるが、当初は、火車や汽車、ダンスなど、物珍しい光景が映し出される2-3分の実写フィルムで「活動写真」と称されていた。農村などでは学校などで上映されることが多かったそうだが、豊橋では劇場で上映された。1900年、01年と、豊橋盲啞学校補助のための活動写真大会が東雲座で行われるなど、慈善事業の啓蒙などにもたびたび用いられている。さて、

今日午後6時より豊橋上伝馬朝日座に於て三日間活動大写真会を催す由なるが、是まで当地に於て催せし活動大写真は皆失敗せしが、今回は各所にて好評を得たるものにて…巴里大博覧会、北清列国群戦争の部数大沽砲台落城の壯観、北京落城及各国総攻撃の所など…定めて大入なるべし（参陽新報1901.10.02）

とあり、これ以前の活動写真が不評であったことがわかる。また、1903年11月26日の新朝報には記者自身が見てきた内容が詳しく記されている。少々長いが、記者の興奮した様子が生き生きと伝わってくるのでそのまま引用したい。

ボート、レースに自転車レースと少々飽きの来たところに目先の変った活動写真。うまく人気に投じたので一昨夜の初日は満場膝を重ぬるばかりの大入。さて写真の番組は広告にて皆様先刻御承知の事ならんが、其外新荷着の附録が56枚もあるといふ大景物。なかに

も世界八大強国の軍人が、一人づつ現はれて旗を受取るといふ写真、時節柄面白かりし、其他ナイアガラ瀑布、倫敦の大火事、汽船の出帆等、とりどりに面白く、角力あり魔術ありヲペラダンスあり、幽霊を鉞で斬付ける西洋の泥棒、洋服のかん守関兵衛といふ趣きありておかしく、仏国の記念碑除幕式に騎兵の河を渡り水けむりを蹴散らして山に登る処は勇ましく覚へし。ことに楽隊といふにぎやかな鳴物付、説明者の滑稽満場のこどもを喜ばせし無邪気なる笑は劇場も動くばかりなりし。いよいよ今日がお終ひゆえまだ見ぬ人は日暮からどンドンお出かけなさいませと頼まれもせぬ提灯もってサアいらっしゅいらっしゅ (1904.11.26)

これらの記事から、ちょうど日露戦争前後—1901年から04年あたりに。豊橋の人々がはじめて活動写真を目にするようになってきたのではないかと予想される。戦争終結後、日露戦争の記録映画は、豊橋市内の劇場で代わる代わる上映され、人々の記憶にとどめられていった。

2.4 ニュース、そしてプロパガンダとしての絵はがき

ところで、現在は観光名所で購入するのが定番となっている絵はがきであるが、日露戦争当時は写真というメディアを用いた最新のニュース媒体でもあった。絵はがきは、当初、年賀状や商店の案内などとして使われていた。絵はがきが人々の暮らしにもたらした効用について、市島謙吉は1911年に次のように振り返っている。

我国一般の家庭には絵というものに親しむ機会が少ない。錦絵というようなものは古くからあったものであるが、それはある一部の家庭にのみ限られて、全体に求める訳にはゆかなかつた。殊に錦絵の如きは子どもの弄ぶものとしては甚だ興味の少ないものであるから、子どもが絵によって知識を得るということは在来の家庭では難しかった。(一方絵はがきは) あらゆるものが描き出されて有るので、子どもが今までおぼろげに想像していたものを、実際に明確に知りうるという事になって、子どもの知識を助けること一方でない。(中略) 実況が見られること、また構成に伝へるといふ事は絵葉書が一番の道具である。否、絵葉書の外にはあるまいと思ふのである。(市島,1911:1-3)

絵はがきは当初報道の役割も担った。絵はがきブームをもたらしたのは、通信省が1904年の9月から11月にかけて発行した日露戦役を記念した絵はがきシリーズだった。発売日には各地で長い行列となり、時に死者まで出る騒ぎとなり、豊橋においても、第一回の発売に関して、「早朝より各売下所はこれが発売をなしたり、何がさて日露戦役の絵葉書となれば各所とも売下の解しをなすや瞬間に売りつくし、八・九時ごろにはすでに売り切れの好況なりし。(中略) 因みに従来通信省が発行せし記念絵葉書中、今回の絵葉書は紙質といひ図案意匠といひ類稀なる上出来なるが上に日露戦役記念なりしかば、斯る売れ行きを見たる (04.09.09『新朝報』)」との記事がある。人々は、新聞などで文字で知った戦況を、政府が力を入れて製作した豪華な絵はがきによって、再び視覚的に確かめたいと考えたのだろう。当時は新聞や雑誌が十分に写真を載せられない時代で、コロタイプ印刷を主とした絵はがきは、日露戦争の現場を見たいと欲望する人々にとって、格好のニュースメディアだったのだ。

ところで絵葉書発行の時期は、8月以降続いた旅順の総攻撃によって戦死者1万5000人強という莫大な犠牲が生まれ、新聞紙面にも戦死者情報が多くなり、投書欄も4-5月の戦勝ムー

ドが消えて徐々に戦争に懐疑的な内容が載せられるようになった時期と重なっている。さらに、このころから愛知県内の扶桑新報、中京新報が新聞紙条例違反で訴えられたり、豊橋国民舎から出版しつつあった『日露戦争国民の友』と題する雑誌が発刊禁止になったりと、徐々に地方においても政府の情報統制が厳しくなってゆく時期でもあった。一連の絵はがき発行は、こうした時期に、戦意高揚を狙ったプロパガンダの一環としての意味も持っていたと思われる。

その後、絵はがき収集がブームになっていくにつれ、戦果そのものだけでなく、凱旋の様子や軍艦といった関連のものごとモチーフとして人気を呼ぶようになり、幅広い階層や年代に富国強兵を訴えかけていくツールとしても用いられた。

こうしたブームは東京一地方を問わなかったようだ。豊橋の書籍店・文海堂は、このブームと時を同じくして、軍事郵便用・年賀用の「戦争画、風俗、風景、美人、草花等数百種」の絵はがき販売の広告を「新朝報」に載せている。民間でも名所、美人などを題材とした絵葉書が多数発行されるようになるが、注目すべきなのは、このうち大都市ばかりでなく、中小の町や村においても、祭礼や建築物、軍の関係施設や、時には学校や工場の記念写真が絵はがき化されていることである。豊橋市二川宿本陣資料館で2006年に開催された地元絵はがきの展示会では、主に1900年頃から第二次世界大戦前後までの、1200点余の豊橋を写した絵はがきが集められた。もちろん、同じ写真を用いたものがあるが、それでもこれだけの種類が発行されていたという事実は、写真を用いた速報性や低価格であるという長所を持った絵はがきというメディアに、当時、今とは比較にならないほど大きな需要があったことを物語っているだろう。

これら地域絵はがきの印刷は、東京や名古屋だけでなく、豊橋を初めとした地方都市やもっと小さな町でもごく普通に行われていたようだ。豊橋の場合、印刷所として、豊橋市内の書店、写真店や、絵はがき書店などの名を見ることが出来る（豊橋市二川宿本陣資料館編、2006）。豊橋を写した絵はがきは、多くの場合セットで袋に入れられており、主に観光みやげとして売られていた他、記念写真のようなものとしても所有されていたらしい。

絵はがきの発行時期を正確に特定するのは難しいのだが、1900年から07年までのものは宛名面に通信欄がないことでわかる。豊橋を題材にした絵はがきのうち、日露戦争前後に出されたものは68点あるが、多いのは駅や学校といった都市の公共施設や町なみである。豊橋に特徴的なのは、神武天皇像や軍関係の施設が多いことで、神社仏閣、城といった名所旧跡や自然を題材にしたものはほとんどない。地域、地方の風物を写し出すはずの名所絵はがきにも、神武天皇像や軍といった国家的な表象が映し出されているのが印象的だ。これは、ほとんど豊川稲荷を題材とした絵はがきしかない隣町・豊川の事情と大きく異なる。軍施設の絵はがきは、除隊や帰省の際に記念に購入したり、入隊に付き添った人々がみやげに購入したりする需要を見込んでいたようで、同様のものはそれ以前にも錦絵として販売されていた。

2.5 広告、絵びらに見る近代化、そして日露戦争

広告は、その当時の人々の欲望のありかを照らし出すメディアである。明治期には、絵びら（引札の一種）という、新年に得意先に配る店名入りのチラシがあった。主に部屋の壁に貼り付けて長期間広告効果をもたらすため、華やかでモダンなモチーフが人気を呼び、レンガ造りの駅や電信柱、舶来の小間物屋などの絵に、豊橋の店名が入れられている。

豊橋周辺で発行された絵びらは、その多くが「名入れ」によって刷られたもののようだ。東京を初めとした都市の版元は同じ絵柄のものを大量に製作して製作単価を安くし、その後、その見本刷りを持って各地の商店を回って注文をとり、空白部分にその店や商品名、住所などを入れて印刷した。豊橋・豊川近辺で発行された広告や絵びらの収集家、佐溝力によれば、豊橋で発行された絵びらは、大阪、名古屋の印刷業者によるものが多いという¹⁰。

また、新朝報に見られる新聞広告も、日露戦争時になると、軍隊の様子や艦船などが人々の需要を引き起こすことを狙ったモチーフとして挿絵に描かれる。皇軍連捷を祝う地元商店の合同広告において、書店は「日露の図書」を扱っていることにも触れて、博文館発行『日露戦争実記』の特約も宣伝している。胃腸薬広告や靴の広告などにも日露戦争がらみのモチーフが描かれている。全国的に見れば、このころを境に、広告が時代を感じさせるものを描きだしながら宣伝していく現在の広告のしくみができあがり、広告が商業をつくり出す現象が生まれてきたようだ(山本・亀井,2004)。

3. 結語：明治期における中央一地方

これら、明治期の豊橋から見えるメディア状況を中央一地方という視点から考察し、以下の3点に注目することで、まとめとしたい。

まず、これらのコミュニケーション網の進展によって、各地域が全国共通の時間感覚、ひいては標準時のなかに組み込まれていったことである。新たなメディアは、それまで一日単位で作業を行っていた地方の人びとに欧米流の「時間」「曜日」の感覚を刷り込んでいった。鉄道は時刻表に従って運行され、郵便も毎日決められた郵便所要時間に従って通信員が配達し、停車場や郵便局には時計が設置された。電信によって、各地で「午砲」が打たれ、正午を知った。新聞が曜日の感覚を刷り込み、特に戦争といった一大ニュースを号外や速報で伝えることによって、津々浦々に暮らす人々の関心を国家的なレベルに向けていった。異なる地域の、異なる職業の人びとが、こうしたメディアが複合的に作り出す共通の時間感覚の中に囲い込まれていったことは、そののちのラジオやテレビなどのマス・コミュニケーションの進展や国民国家の形成に大きな意味を持つといえるだろう。

次に、郵便以外のコミュニケーション手段は、大都市の上・中流層には急速に普及したものの、それ以外の人びとには長い間なじみのないメディアであり続けたことである。交通・通信網は、導入期において、地域間、階層間の格差を増幅しながら普及していったのである。しかし、その一方で、日露戦争という国家の一大事が、階層差や地域を超えて、外部世界への共通の関心(有山, 2003: 86)を生み出してもいった。戦争は津々浦々の人を同じ関心へと導き、それに新聞を初めとするメディアが商業主義的関心から積極的に関わったことも忘れられない。

三点目に、こうしたさまざまな新しい「メディア」とそれをめぐるありかたそのものが、近代とは何かということを体現してみせていたことだ。西洋建築で建設された駅や電信局、郵便局。切手を購入して貼付しさえすれば誰にでも書状が届けられる郵便システム。切符を買いさえすれば誰でも移動の自由が保障され、地域間の関係性を線路網において体現していた鉄道システム。こうした「メディア」の存在そのものが、複合的かつ有機的に絡み合いながら、人々に近代化の意味を伝えていくのに貢献したといえるだろう。

少し逸れるが、そうした点から、いま一度、中央—地方について考えをめぐらせると、東京を頂点としたシステムだけでなく、海外との接点が神戸、長崎、横浜のほぼ3港に限られていたのは、輸出入が増加したこの時期、豊橋のさまざまな舶来品広告から見ても不自然に思える。加藤秀俊、前田愛は、外との接点を少なくして内—特に東京との連絡や交通を密にするという構造が、地方を中央に従属させて、直接世界に向かって窓を開くチャンスを与えず、「文化はつねに中央から配給されるもの」とする観念構造を作り上げていったのではないかと指摘している（加藤，前田，：139—141）が、今後、検討に値する視座だろう。

これらをまとめると、資本経済が発展した結果として試行錯誤のなかでメディアのかたちが作られていった欧米と異なり、明治政府は、欧米ででき上がった各種のメディアをかなり初期から積極的に導入したり保護したりして、地方との支配のため、時に軍事目的で利用していったことがわかる。そして、政府主導で形成されたこれら新たなコミュニケーション網を通じて、文明開化、富国強兵、殖産興業といった新たな価値観が地方に暮らすさまざまな階層・職業の人びとに効率的に伝えられ、地方を「支配」するツールとして機能した¹¹。そして、これらが「地方支配」の地ならしを終え、一般の人々も使える形に開放されてゆくと、徐々に産業的用途に用いられるようになり、地方で産業革命を引き起こす動力となったり、日露戦争の事例にも見られるように情報産業を成立させるような動きにつながっていった。

もちろん、こうした「支配」の力が、単純に一方的にばかり働くわけではない点にも触れて本稿を閉じることにしたい。中央からのメディアが地方に普及してゆく一方で、それらをローカライズし、地域で根付かせてゆくとする動きもまた生み出されてきた。中央からの支配に対する強い抵抗は、明治初期の十年に旧士族によって起こされた反乱と、電信に対する抵抗以外には、日本においてあまり見あたらないが、地域での新聞発行や絵はがきの発行などにも見られるように、地方に暮らす人々は、中央からもたらされた新たな近代のメディアに驚き、畏怖しつつも、したたかに自らの生活や表現に用いてきた。そうしたメディアを用いた地域での表現活動を通して、中央の近代のかつ都市的な価値観がその地域にあった形で翻訳されていくことにもなったといえる。

本稿では、明治期の地域におけるメディア敷設と受容を俯瞰したわけだが、明治期と現在の中央—地方のメディア戦略や受容過程には現代と共通する部分が少なからずある。こうした知見を参考に、今後、大正期、昭和期の分析へとつなげてゆきたい。

※ 本論文は、韓国・翰林大学紀要「日本学研究11号」に執筆したものを加筆修正したものである。なお、研究には、愛知淑徳大学2006年度特別研究助成を受けている。記して感謝したい。

【参考文献】

- 有山輝雄「ある地域社会における新聞雑誌購読——福島県梁川町・明治期の事例」メディア史研究 15 2003.11 p66～88
- 有山輝雄「電話導入初期と地域社会/明治末期から大正初期梁川町における」メディア史研究 17 2004.11 p88～111

- 石井寛治『情報・通信の社会史－近代日本の情報化と市場化』有斐閣 1994
- 市島謙吉「世間と絵葉書」『絵葉書世界』1911
- 小川明子「メディアと地方－暮らし、思想、情報の画一化」新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らしの民俗学①』吉川弘文館 2006
- 小川常人『近代郵便発達史』座右の書物會1983
- 加藤秀俊・前田愛『明治メディア考』中央公論社 1980
- 窪田重式「絵葉書論」『絵葉書趣味』日本葉書会1906
- 小林正義『みんなの郵便文化史－近代日本を育てた情報伝達システム』（株）にじゅうに 2002
- 佐藤健二『風景の生産・風景の解放－メディアのアルケオロジー』講談社選書メチエ 1994
- 寺岡伸悟『地域表象過程と人間』行路社 2003
- 豊橋市史編集委員会編『豊橋市史3巻』1983
- 豊橋市編『とよはしの歴史』 1996
- 豊橋市二川宿本陣資料館編『絵葉書のなかの豊橋－思い出の風景をたずねて』2006
- 日本国有鉄道編『日本国有鉄道百年史／通史』1974
- 日本新聞販売協会編『新聞販売百年史』1969
- 日本電信電話公社／東海電気通信局編『東海の電信電話90年の歩み』1963
- 芳賀信男「新聞広告から見た豊橋近代芸能史」私家版 2006
- 橋爪紳也『絵はがき100年』朝日新聞社 2006
- 原田勝正『鉄道と近代化』吉川弘文館 1998
- 藤井信幸『通信と地域社会』日本経済評論社 2005
- 二川宿本陣資料館編『近世豊橋の旅人たち－旅日記の世界 二川宿史料集第1集』 2002
- 松田裕之『明治電信電話ものがたり』日本経済評論社 2001
- 宮脇良一『豊橋言論史－郷土新聞をめぐる人々』東海日日新聞社 1973
- 山田俊治『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』NHKブックス 2002
- 山本武利・亀井昭宏『明治と広告～社会史の視点から』ADSTUPIES vol.9.2004
- 郵政省編『郵政百年史』1971
- 若林幹夫『熱い都市冷たい都市』弘文堂 1992

-
- 1 豊橋市史3巻：133ページ。新聞販売も取り扱った春風堂は自由党系の雑誌『民之心』も発刊しており、全国的に販売されてもいた。当時は書籍商組織が新聞販売を兼ねる形で普及していった。
 - 2 1872年の農民一揆でも、電信局が攻撃対象になったのと同様に、地域の名望家を取り仕切る郵便局はほとんど影響を受けなかった（郵便百年史：115－116）ことが象徴的だ。
 - 3 「新聞原稿送付規則」（1883年）
 - 4 最初の幹線は当初中山道が想定されていたが、予算が抑えられるという理由で、最終的には東海道が選ばれることになった。

- 5 当初は自由派の機関紙として地元の有力書籍店の経営で発行されたが、後に社長が変わり、その関係で改進黨系へと変容した。その関係で、自由黨系の流れを汲む実業談話会から『新朝報』が発行されることになった。(宮脇良一, 1973: 23-24)
- 6 参陽新報もこの時期発刊されているが、04年に関してはほとんどが欠落している。
- 7 1904年10月29日の広告には、豊橋新聞合資会社が東京日日新聞を写真木版挿画、彩色刷り旅順要塞戦図ありと、他紙と差別化して販売している様子が見られる。
- 8 近世には吉田常芝居という芝居小屋があった。1825年に大阪で発行された「諸国芝居繁栄数望」と題する見立て番付では、4等級のうち、吉田は第2級の下位。近辺では第一級に尾張名古屋橋町芝居、若宮八幡宮芝居などのほか、伊勢や松阪の芝居が、第2級に津、一身田芝居が、第3級に岡崎、知立、名古屋宮芝居などが位置づけられているという(芳賀信男, 2006)。
- 10 豊川市在住の古物商である佐溝力への聞き取り調査と資料閲覧による。(2006.9.12)
- 11 その後新聞が自由民権運動で権力者批判を始めると、政府は弾圧に転じ、1875年には新聞紙条例と讒謗律が定められ、しばしば発行停止や、記者の投獄が行われた。
- 12 たとえば、1960年代以降のニューメディア政策、地域情報化、e-JAPANといった政府主導のメディア敷設のありかたなどと共通する。さらに、それから外れた地域が発展から取り残されていくという構図も、現在のブロードバンド敷設をめぐる状況と酷似している。